

け　　ふ

机のもとなる埋火も白うなりぬ。寒さの常ならねば、とくふしどにと思ふに、影のやうなるもの、我目をよぎりて何處ともなく消江ゆくよと打まもりをる程、幽かにく地の底よりや響くと覺ゆる聲きこゆ。二度は歸り來まじき今日の日の、今ぞすぎゆくをとぶらへ、一日の命を長うせしを謝せよかしといふ。否々、我はとぶらはじ、謝せじ、今日よく、あまりにも君はつれなかりき。去つて再び歸らぬこそよけれ、とくすぎよかし、といふに細き聲再び聞ゆ。何事のさはつらきぞと、問ひたゞすらんやうなり。いで、今日の日よ、今日といふものゝ來つればこそ、志ばしの休みの眠りをさめいでてつらきうき世の波にたゞよひ、心にそまぬなりはひの道におはれ、志ばしもいこふ時なく、勤めにつとめて、何をか得し、あはれわがけふ得しむくいは、身のつかれと心の苦とのみ、今日よ、かくても猶我に謝せよといふか、一日をつむは一日の悔をますのみなるに、この上の命ながしとて何にかせむ、と答ふ。君よ、我に謝せじとかそは御心のまゝぞかし、さらば君はかりそめの眠りに、我は永久の淵に去らんよ、我去らば又新らしき今日は來べし、新らしき日の新らしき苦は、再び君をおとづれん、いざさらば、いざさらばといふかと覺江て、再び影の如きもの見江そむるやがて消えゆかんとす。今日よく、しばしまて、今ぞく、我は君をとぶらひ、君に謝すべ

きを、いかで共に永久の淵に伴へかしといふ時、何ならんあざみ笑ふ聲す。障子の紙にはさらく、と物のあたる音ありて。

【入力者注】

底本に行をあわせるために、句読点のフォントサイズを小さくした箇所があります。

底本・佐々木信綱編「竹柏園集第弐編」

明治三十五(1902)年五月廿七日発行

入力・小林 徹

公開・令和四(2022)年四月二十八日

改訂・令和四(2022)年十月十一日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。